

内包的他動詞に対するマイノグ的な意味論

藤川直也（首都大学東京／日本学術振興会特別研究員）

‘seek’、‘want’、‘imagine’などのいわゆる内包的他動詞を含む文には、不特定読み（あるいは notional な読み）と呼ばれる特殊な読みをもつものがある。たとえば、

(1) John seeks a dog.

は、ジョンがある特定の犬（たとえば、自分の飼い犬）を探しているわけではなく、防犯用に犬を飼おうと思ってペットショップをうろうろしている、という状況でも真になる読みをもつ。この読みは、(1) に

(2) $\exists x(\text{dog}'(x) \wedge \text{seek}'(j, x))$

のような論理形式を与えることによって説明できないと考えられてきた。というのも、標準的な量化の解釈に従えば、(2) が真であるためには、(量化のドメイン内の) ある特定の犬について、ジョンがそれを探しているということが成り立たなければならないからだ。

不特定読みに対する一つの古典的分析は、Montague (1973) で提示されたものである。それによれば、(1) の不特定読みは、

(3) $\text{seek}'(j, \lambda Q \exists x(\text{dog}'(x) \wedge Q\{x\}))$

と分析される。ここでは、目的語の名詞句の意味論的貢献は、その名詞句全体の内包 $\lambda Q \exists x(\text{dog}'(x) \wedge Q\{x\})$ である。この内包はおおよそ、〈少なくとも一匹の犬がもつ性質であるという性質〉という二階の性質に対応し、内包的他動詞は、主体と、目的語の名詞句全体の内包との関係を表示する。現在、内包的他動詞の不特定読みに対してはいくつかの意味論的説明があるが (Forbes, 2006, Richard, 2001, Zimmerman, 1993 など)、これらの理論は、目的語として現れる名詞句の意味論的貢献が正確にどのようなものか、そしてそれが文全体の意味論的表示においてどのような役割を果たすかに関して相違があるものの、目的語の名詞句を内包的に扱う、つまりその意味論的貢献をなんらかの高階の存在者（性質や、性質の性質など）と見なすという点で、総じてモンタギュー的であると言える。

これに対して発表では、‘seek’ に焦点をあわせながら、目的語の量化名詞句を、あくまで一階の対象に対する量化表現として外延的に扱う意味論を提案したい。基本的なアイデアは次の二つである。(i) ‘s seeks an F’ という形式の文は、不特定読みの場合も、(2) のような論理形式をもつ。(ii) 不特定読みにおいて、目的語の量化名詞句は、不完全対象という特殊な対象に対する量化を含

んでおり、‘seek’は、主語の表示対象とそのような不完全対象の関係性を報告している。本発表では、これらの考えを、Parsons (1980)におけるマイノング的な対象理論に基づいて具体化する。その上で、(4a)から(4b)、(5a)から(5b)への推論によって例示される内包的他動詞の上方帰結的性格をどう説明するかという点に関して、モンタギュー的な意味論と本発表の提示するマイノング的な意味論とを比較検討したい。

- (4) a. John seeks a beautiful hotel.
b. John seeks a hotel.

- (5) a. Mary seeks three dogs.
b. Mary seeks two dogs.

参考文献

- [1] Forbes, G. (2006). *Attitude Problems: An Essay on Linguistic Intensionality*, Oxford: Clarendon press.
- [2] Montague, R. (1973). ‘The Proper Treatment of Quantification in English’, in Hintikka, J. *et al.* (eds.) *Approaches to Natural Language*, 242-270. Dordrecht: Reidel.
- [3] Parsons, T. (1980). *Nonexistent Objects*, New Haven: Yale University Press.
- [4] Richard, M. (2001). ‘Seeking a Centaur, Adoring Adonis: Intensional Transitives and Empty Terms’, *Midwest Studies in Philosophy*, 25, 103-127.
- [5] Zimmerman, T. E. (1993). ‘On Proper Treatment of Opacity in Certain Verbs’, *Natural Language Semantics*, 1, 149-179.